

禪の師家 佐々木承周

盛大に祝す

1 ページ

この記念アルバムは、佐々木承周老師の 85 歳の誕生日とアメリカでの禪の教化の 30 周年を機に出版するものである。

2 ページ

文章

君たちはみな、ある意味で、美しくこの世界に生まれた。あなたが生まれたとき、全く、完全であったことをうれしくおもう。だから私は君たち全員の誕生日を祝う。君たちには皆、常に君たちの真の本質とともに、新しく生まれるチャンスがある。

どのように言葉を紡ぎだそうとしても、このお祝いに対する感謝の言葉を伝えることはできない。私の本質が宇宙そのものと調和してしまったようだ。そのことについて、説明する必要はないと思う。この私の気持ちを俳句に詠みたいと思う。

行くべきところはない

どこにも行く必要はない

私は宇宙とひとつだからだ

皆、誕生日おめでとう。そうだ！ この幸せな機会に、質問をしよう。皆には過去、現在、未来があるか？ 君たちは宇宙と共に曲にあわせて手をたたいていた。私の誕生日を祝っていたとき、君たちは自身の誕生日を祝っていたのだ。そのように理解して、私は君たち全員に今

日新しく生まれて欲しいと思う。ありがとう。

ブッダの歳と私の歳は同じです。

人が生の働きから自由にならないならば、その誕生には何の意味もない。

どんなに変化をしても、基礎的な状態は同じである。ここは完全な静寂の地平であり、吹く風もない。そしてここから、禅の修行者が生まれるのである。

写真 注

誕生日の老師

3 ページ

盛大に祝す

写真 注

撮影：スティーブン・フラッド

4 ページ

写真 注

5 ページ

目次

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・	6
承周老師とのインタビュー・・・・・・・・	11
提唱・・・・・・・・・・・・・・・・	22
臨濟寺をとりまく施設・・・・・・・・	40
質疑応答・・・・・・・・・・・・・・・・	64

表紙のエンブレムは杏山承周老師の記章である。5つの花びらは、杏の花である。老師の道号である杏山は、杏の山という意味である。中央の4つの四角形は佐々木家の家紋であり、恐らく四諦の真理を意味していると思われる。金色の線と中央が赤くなっているのは、教えの豊かさと輝きをあらわしている。

私たちは、再度、インタビューと提唱、質疑応答の時間をくださった老師に感謝します。

著作権の表示：1992年、佐々木承周がすべての権利を留保する。

出版：カリフォルニア州 ロサンゼルス 臨濟寺

植字：PCグラフィックス

印刷：イサカ・カユガ・プレス

出版元による書面の許可がない限り、この書籍のいかなる部分も、いかなる形態、いかなる手段であれ、複製することを禁止する。

6 ページ

はじめに

佐々木承周老師を中心とした共同体である臨濟寺は、5年前に、彼が禪の教化のためにアメリカにやってきて25周年になることを称えて、記念アルバムを出版した。その本には、老師の人生と、老師のもとに集まってきた人々が作った、主な（禪の）共同体の歴史が書かれていた。そのアルバムはキリスト教の修道僧との取り組みや、禪の知的基礎を完全にとりいれた、経典の公開セミナーを立ち上げたことが順をおってかかっている。

現在、老師は85歳という、またひとつ特筆すべき節目にたどりつき、かれのエネルギッシュな活力は、本当に何というべきか、奇跡的である。彼は依然として、マウント・ボールディ禅センターの冬と夏の修行期間を主導している。さらに秋と春には、ジェメス・スプリングスで猛烈な修行がある。また、ロサンゼルスで臨濟寺で大摂心があり、それにウィーン、プリンストン、イサカを旅行してまわる……。そして一日4回の参禅があり、毎日提唱をする。そして自己の真の状態を明らめ、心を平安にするためにやってきた人々を常に教導しているのである。

老師のたゆみない努力に感謝の意を表すために、過ぎ去る時間のなかのひとときを取り上げたいと思う。これによって、永遠なるものを指さす人に感謝するものである。このアルバムと、誕生日の夕食会は、ほんの少しの（感謝の）印であって、これだけで私たちの感謝の気持ちの深さをすべて含められるわけではなく、また、私たちの感謝の気持ちの恩返しができるわけではない。実際、どのような言葉をもってしても、適当な表現が見つからない。

このアルバムについては、5年前に世に出した年譜や共同体の歴史をもう一度繰り返すのではなく、いくつもの老師の教えを掲載し、古くからの修行者の逸話や貢献について掲載する。いくつかの引用文や写真は、臨濟寺の昔の出版物から借用した。これらは、重要なもので、ま

た鮮明だからである。老師の（提唱の）引用と、ほとんどの逸話は、本文とは別にしてある。（色んな人の）貢献は、あまりに多くて紙面が足りない。編集者は、仕事をしたのにその記述がされなかった人々に謝っておく。取捨選択するのは本当に難しかった。概略でも山ほどの話があって、それを全て出版することはできず、ほんの少しの逸話だけを選んだ。

老師の忙しいスケジュールと最近の手術のために、老師と一緒に（英語への）翻訳が正しいか完全にチェックすることができていなかった。しかし、ほとんどの記事を翻訳者が点検した。もし何か間違いがあれば、特に法に関して間違いがあれば、衷心より謝罪する。（しかし）アルバムの出版が遅れ、誕生日の夕食会にあわせてアルバムを配れなくなるよりは、ちょっとした間違いがあってもアルバムを出版するほうがよいと思った。

この本は、多くの臨済寺のメンバーの努力なしにはありえなかっただろう。もっとも特筆すべきは、レナード・コーエンとケリー・リンチである。この二人は出版に至る作業を行い、仕上げの細かいところに助力をしてくれた。コウゲツ・マルシア・ラディンは非常に価値ある編集補助者であった。

— ヨシン・デイヴィッド・ラディン、編集者 —

9 ページ 写真 注

ミョウキョウ・ジュディス・マクリーン（左）とホーセン・クリスチャン・レインジャー

佐々木承周老師の年譜

1907 年 生誕

1921 年 見習い僧となる。

1947 年 得度をうける。（訳注：1928 年の間違いと思われる。）

1947 年 老師となり、瑞巖寺の塔頭の陽徳院の住職に任じられる。

1953 年 正受庵の住職

1962 年 米国に来る

1968年 シマロン禅センター設立

1971年 マウント・ボールディ禅センター設立

1973年 ジェメス・ボーディ・マンダラ設立

1988年 マウント・コブ・サイ・ショウ禅寺設立

冬の制中

1983年から84年

重要なお知らせ

承周老師の引退が近づいており、4日ではなく5日の大摂心を行いますのでお知らせします。古くからの修行者が今年の大摂心に参加して、より深い修業をつむことを切に希望します。

写真 右上 注

冬、マウント・ボールディの化学式トイレを待つ

写真 左下 注

禅センターから見えるマウント・ボールディの峰

11 ページ

インタビュー

英訳：シンゼン・ヤン

聞き手：30年前に老師がアメリカにやってきたとき、今後、世界中に十指に余る禅センターができ、何千もの修行者ができるとの見込みはありましたか？

老師：全くなかった。そういう筋の期待は全くしていなかった。5～6人、本当に禅の人生を生きる修行者ができることを考えていたし、そうなるだろうと思っていた。アメリカで骨を埋めるつもりでいた。寺やセンターをつくる計画はなかった。妙心寺は寺を建設して仏教を広めようと考えていた。しかし、私はそれは非現実的とおもった。ここにはキリスト教という既存の宗教があり、実際のところそれは国教だった。もちろん、何がしかのセンターは必要ではあったが、5～6人の人が住むセンターを考えていた。

聞き手：老師がアメリカに禅の人生を生きる数人の人がいればいいとおっしゃるとき、「禅の人生を生きる」とはどういうことか、詳しく話してくれませんか？

11 ページ 文章

「私は天国であり、私は地獄である。東にあらわれる世界は私であり、西にあらわれる世界は私である。」このように理解する智慧の中に、湧き起るものがある。これが、私たちが目覚めた自己により目指すところである。そのような目覚めた自己をサンスクリット語でブッダというのである。

ブッダの意味するところは、目覚めた自己に他ならない。自己が、常に自己自身を見ていると理解する、そのような自己としてあなたが生起するとき、あなたはブッダなのである。

12 ページ

老師：禪の人生を生きるとは、坐禅をして、禪の本質を明らかにすることを意味する。禪の教条や禪の哲学のようなものはないといわれるが、もし人々を教導するなら、教導するための知的なフレームワークが必要になる。私は、ここにやってきて人々を教導し、坐禅を通じて教理を明らかにすることが任務だとおもっている。たくさん人があつまるとは思っていなかった。ここはキリスト教国だ。キリスト教で事足りている。ここに来るのは、キリスト教に飽き飽きした人だけだろうと思う。（禪を）広く普及させたり、センターを作ったりすることは考えていなかった。キリスト教との対立は望んでいなかった。キリスト教国において、あちこち歩き回って人々に坐禅をすすめたら、キリスト教と対立することになるだろう。こちらに（アメリカに）やってきて、「こんにちは。私は禪の師家です。」とって、まあ言うなら、禪のために太鼓をうちならすようなことはしたくなかった。私はそんな風にはできないし、その上、英語も知らなかったしね。

聞き手：西洋の宗教は、よそからやってきては、既存の宗教を否定して太鼓をうちならすような人々の、悪しき歴史がありますね。

12 ページ 文章

1992年6月30日、老師は胆嚢の腹腔鏡手術のために入院した。腹腔鏡手術は新しい技術で、胆嚢に係る病気の95%に効果がある。その手術はいくつかの小さな切開しかせず、入院の必要はない。医師が手術を始めると、胆石が大きくて、腹腔鏡手術ではだめであることがわかった。（いくつかは直径で1インチもあった。）老師の胆嚢は状態が悪化しており、周囲の臓器が衰えていた。伴っておこっている全ての症状を治療するためのちゃんとした切開手術が必要だった。回復に必要な時間は何週間、あるいは何か月に及ぶといわれた。

私は85歳の老人がそのような難しい手術をすることに不安を感じた。

13 ページ

老師：私は物事を平和のうちに留めておきたかった。しかし、多くの人がキリスト教に幻滅していた。人々がやってきて大人数になった。

聞き手：「坐禅を通して教理を明らかにする」というのは、どういう意味か、詳しく話してもらえますか？

老師：私が、教理を明らかにするというのは、教理を学ぶだけでは十分ではないということだ。あなたが人生を生きる、その生き方で教理を示さなくてはならない。それが明らめるということだ。修行者は自身のために、「そう、確かに、これが教理である！」と悟らなくてはならない。私は、禪とは完全な自己を研究し、明らめることであると教えている。完全な自己とは、生と死という一見分離している動きが統一されたところにある。古い自我は消え去る。この二つの動きが新しい自己となって生まれる。核心をつくなら、これが教えである。

聞き手：老師の30年にわたるアメリカでの修行者の教導のなかで、アメリカ人のほとんどの在家の人々より、日本の僧侶を鍛える方が、より適切に時間をつかえるのではないかな、そんな考えがよぎったことはありませんか？

13 ページ 文章

このような大きな手術が必要となることで、将来の（老師の健康状態の）低下に責任を感じた。手術が終わって老師が私のところへ来たとき、老師は側にすわっている私を見て言った。「レナード、顔色が悪いぞ。青ざめている。心配だなあ。お前、倒れたんじゃないか？」老師は鼻に酸素チューブを入れた状態でベッドに横たわっていた。喉にもチューブ、切開したところもチューブ、腕には静脈点滴の針、体につながれたいくつかのモニター……。しばらくして、老師は言った。「病気は興味深い、生は苦しみだ。」私は尋ねた。「それ（生）はそれ（苦しみ）に値しますか？」老師は答えた。「価値はただの人間の想像だよ。」そのとき、老師が戻って見えたと思った。その8日後、老師はマウント・ボールディで参禅をさせた。

14 ページ

老師：いいや、日本のことは完全に忘れてしまったよ。私が合衆国に来たとき、アメリカの二人の人にしか興味を示さなかった。（訳注：“am”は“was”、“that”は“when”の誤記と思われる。）ここに来るからには、私は理想的な考えをもっていた。禪を普及させることは難しいと思っていたし、そのことは日本人についても同じだからよくわかっていた。日本では、僧侶は寺院と（檀家の）会合の物理的な維持に大きな労力を割かなくてはならず、坐禅を広めるための時間はない。

聞き手：もし老師が日本に残っていたら、85歳のときに、どのようなことをされていると思いますか？

老師：もし私が日本に残っていたら、アメリカでしたような教え方はしなかっただろう。多分、人々がきて教えてくれといったら、「教えたくはない、良い老師はたくさんいるから、そこへ行きなさい！」と言ったと思う。

聞き手：老師は、ちょうど今、40人の修行者と摂心の折り返しにいます。老師は毎回1時間半の参禅を1日4回させています。それに提唱。85歳でこのようにすることを、どのように感じていますか？

老師：私は自分が85歳とは思っていない。私は自分を若い男だと思っている。提唱の後、本当に若さを感じる。

聞き手：老師は過去30年間で教導のスタイルが変わりましたか？

老師：常に変えている。たくさん修行者が入れ替わるから、私も（教導スタイルを）変えている。

聞き手：最近やってくる修行者は、1960年代にやってきた修行者と同じでしょうか、それとも違いますか？

老師：難しい質問だね。修行者はベトナム戦争の前後で違っており、後が変わった。ベトナム戦争のとき、たくさん修行者、大学生がやってきて、かれらの多くは神を否定した。戦争の後、どうも神を肯定する方向へ動く傾向がみられたと思う。今、平和の時代にあって、より神を肯定するスタイルになっている。しかし、平和にむかっているにもかかわらず、平和は安心できるものではなく、今再び、たくさんの人々が神について疑問をもつべきときである。

聞き手：神を肯定するタイプの人と神を否定するタイプの人、禅の世界にやってきて、（禅への）関心の深さや修行のありようで、どのように違うのでしょうか？

15 ページ 文章 右上

自我は空である。仏教が教えること、特にプラジュナー・パーラミター（訳注：般若波羅蜜多）、すなわち智慧の経典において仏教が教えることは、自我をもものとして固定する過ちである。

もし禅の師家のまえに出て「私は永遠である」というと、ぴしゃりとたたかれるだろう。

決して自我を固定してはならない。

15 ページ 文章 右下

どの宗教、どの伝統でも、罪についての教えはある。仏教でも、悪いカルマについての教えがある。仏教では、罪の始まり、悪いカルマの始まり、それは死の拒絶である。私たちが罪について知っていることは、罪が私たちにとって都合の悪いことを拒絶することで始まるということである。自己を完全性をもっていこうとするとき、こうした知識がふたたび意識の表層にわきあがる。拒絶されたものが意識の表層にやってきて、自己にとりこまれるとき、完全な自己が明らかになるのである。

老師：そうだね、神を肯定する人々は、自我を肯定する方法で（物事を）明らめ、神を否定する人々は、自我を否定する方法で明らめる。神を肯定する人々は、神が彼らを肯定していると思っている。これが、平和な時代にこうした人たちが私のところにより多く来る理由だ。神を否定する人たちは、苦しみ、戦争を恐れている人々だ。いいかえると、人は不幸になると、神を否定する。神を否定する人たちのためには、「神が君を否定するとき、君はどこにいるのか？」という問いを發する修業をさせなくてはならない。自我が神によって否定されるとき、自我はどこに行くのか？ そのような考えをすると、修業は興味深いものになる。そして、あなたが神に肯定されるなら、どのような種類の肯定された自我が明らめるのか？ 禅によると、この両方の見通しは、両方とも否定される。

聞き手：老師はこれまでに疲労したり、飽き飽きしたり、もう摂心も参禅も十分やった、そんなふうには思ったことはありませんか？ 目が覚めて、「摂心もいい、参禅もいい」と思ったことは？

老師：私はいつも飽き飽きしているよ。しかし、これが私の義務だから、やる。これが私の仕事だ。

聞き手：老師にこの仕事を与えたのは妙心寺ですか？ それとも法ですか？ あるいは老師自身の洞察でしょうか？

16 ページ 写真 右上 注

テキ・オ・マイケル・ランフォード

16 ページ 写真 右下 注

ドーゴー・ドナルド・スキャンロン

老師：私は生きねばならない。生きることが私の仕事だ。死ぬことが私の仕事だ。修行者の参禅で聞くことが私の仕事だ。私に選択肢はない。禅にはルールがあり、どれだけの修行者がやってきて参禅を望んでも、たとえ真夜中であっても、老師は彼らの参禅をうけなくてはならない。10 年以上まえ、真夜中に、雨がふっていて、誰かがマウント・ボールディの私の部屋のドアをたたいていた。そして彼女はレインコートを着て、懐中電灯をもって、真夜中の摂心のときにやってきた！ 私のドアをバンバン叩いて参禅を乞うていた！ それで、私はドアを開けると、そこにいた頭のおかしい女の子は、以前シマロンの修行者で、真夜中に私をたたきおこしたのだった。私は言った。「今、疲れている。朝に会おう。」すると、彼女は戻っていったので、私は送り戻した。

一般に、宗教において新しいアイデアがうかぶときは、女性が活躍するように思う。もちろん、イスラム教、キリスト教、仏教においては、男性が活躍した。しかし、世の中には他にたくさんの宗教があるし、そこでは女性は重要な役割を果たしている。日本にはいくつかの新興宗教があり、中には女性が創始したものがある。例えば天理教である。天理教は日本の新興宗教のひとつで、何百万もの信者をもつ宗教である。これは女性が創始したものだ。

聞き手：アメリカの修行者が参禅するのと、日本の修業者が参禅するのと、決定的な違いはありますか？

17 ページ 文章

私は手術のすぐあと、マウント・ボールディで老師にお会いした。しばらく会っていなかったし、疲れた、痛々しい老人に会うかと思っていた。しかしそんなことはなく、お茶コーナーに座ってとても気分よく晴れやかにみえた。「老師、とても気分うるわしいようですね！」と言うと、老師は言った。「ブッダはいつも気分がよさそうだし、君も気分がよさそうだし、隠侍も気分がよさそうだ……。お茶をのみなさいよ。」

老師：ああ、とても大きな違いがあるね。なぜならアメリカは民主的な国で、自己をどのように見極めるかということとはとても異なる。アメリカでは、社会や文化にあることで合意が形成されていても、個人がそれに同意しないなら、その人は自分のやりたいようにする。

アメリカ人が禅によって自己を明らかにすることができなと感じたら、あきらめてしまう。彼らは去って、二度とあられもない。これはアメリカの良い点というべきなのかもしれぬ。もちろん沢山のタイプの人がいるし、沢山の人種、沢山の文化があり、全てのアメリカ人を一般化することは困難である。しかしひとつ言えることは、自我が肯定されると、幸せになるということだ。

しかし、日本ではそうではない。自我の肯定では十分ではない。社会全体が肯定されなくてはならない。

18 ページ 写真 注

1967年、ガーデナのコミュニティーホール。コードー・ロン・オルセンが直日、ジェンタイ・サンディ・スチュアートが警策を持っている。

例えば、極端なところでは、昔は、人々は個人の自我を肯定するだけでは十分ではなく、天皇を肯定しなくてはならないと考えていた。キリスト教では神を愛と仰ぐ。神が人々の自我を肯定するからだ。しかし彼らは自己の肯定が神に由来すると信じているので、戦争のようなことが起こると、とても幻滅してしまう。

聞き手：話を禅の修行に戻して、平均的なアメリカ人が修業に来るとき、その文化ゆえに、典型的な日本人に比べて、より大きい自我の躓きがあるのでしょうか？ それはよくある障害でしょうか？

老師：ああ、アメリカ人はより強く自我中心的だね。日本人は自身を社会の一部として明らめなくてはならないと考える。しかし、それはもちろん昔の日本だ。今日、日本では物事は変わっている。昔の日本は、会社や作業場によく残っているように思える。・・・日本の議会から出てくる言論の類をみると、以前の日本からとても違ったようにみえる。

日本人とアメリカ人の物の見方は、根本的に異なる。アメリカ人の物の見方では、個人は社会の基盤である。

19 ページ 文章

快樂の追求において何らかの成功があっても、拒絶されるものが常にある。人々は、死の要素を拒絶することで、生に充足をもたらそうとする。しかし、我々が説く仏教では、死を後に残していくなら、決して完全性を知ることはない。あなたが拒絶する全てのものがあなたの自己に戻されない限り、完全性はありえず、心の平安もない。完全性があらわれるのは、死といった、後に残されたものが自己にとりいれられた時だけである。

日本の社会によると、(訳注：誤植あり)個人は社会に帰属せねばならない。だから、二つの社会は180度反対である。これが、日本の会社ではストライキが少なく、アメリカの会社ではストライキが多い理由である。私は何らかの反感が日本に起こっている理由をみることができる。

聞き手：もし老師が明日亡くなるとわかっていたら、修行者に最期にどのように指示しますか？

老師：私が実際に死にそうになっているときに来て、聞いてくれないか。私はまだ死にそうになっていない。しかし、死ぬとは何を意味するのか？ 死とは、死という働きを明らかにすることである。そして生きるとは、生というダイナミックな働きを明らかにすることである。生と死の働きが分離していると、ある人は生の働きを行い、ある人は死の働きを行うだろう。しかし、人は(生と死の)両方を内容として含んでいる。釈迦牟尼には彼独特の、彼自身の最後の言葉があったし、私も多分、私独特の最後の指示があると思う。しかし、釈迦牟尼の指示をまねようとは思わない。私は釈迦ではない。私は最後の指示で何を言うのだろうか？ 死に際しては、生の働きと死の働きの両方がもうこれ以上働く必要のない地平に入るのである。だから、私は恐らく、もう生きる必要も死ぬ必要もない世界に行くのだ、こう言うだろう。バイバイ、さよ

なら。

20 ページ 文章 右上

「禅修業は難しい！」 私は参禅で激昂してわめいた。「難しい心をしてるな。」老師は言った。「易しい心になりなさい、易しい修業をなさい。」

20 ページ 文章 右下

ブッダが歴史上では釈迦牟尼と呼ばれた理由は、彼が釈迦族に生まれたからである。彼が親からもらった名前は、シッダールタ王子だった。彼はやがて、釈迦族の静寂で聖なる人、すなわち釈迦牟尼と呼ばれる。なぜなら、彼は牟尼（聖者）の体験をした人であったからだ。牟尼の地平、単一の地平、静寂の地平がばらばらになって主体と客体に入っていくけれども、しかし依然として、彼は主体であり、彼は客体である、このように理解したのである。

21 ページ 文章

タターガタ（如来）禅の核心的な教えは、参禅室で伝えられる。

21 ページ 写真 注

老師が聖ジョセフ修道院で参禅させている。カソリックの修道僧のローブをまとして。

23 ページ

提唱

趙州の無

佐々木承周老師による。

翻訳：シンゼン・ヤン

無門関：第一則

僧が趙州に尋ねた。「犬に仏性はありますか？」趙州は答えた。「無！」

今読んだ公案は、趙州の無として知られる。この公案を取り扱うにあたり、最初に「仏性」という表現が何を意味しているのか、理解せねばならない。これはたいてい、英語ではブッダの本質と訳される。ブッダの本質は、この公案を取り組む前に、理解しておかねばならない。

ブッダの本質とは、プロセスであり、ブッダの動きであり、ブッダの働きである。ブッダという言葉の意味が、語義として「目覚めた者」であると言われる。完全に悟りを開き、眼が開いた人が、ブッダとよばれる。

この「目覚め」という働きの根本は何であろうか、その源泉は何であろうか？ 仏教では、その源泉は、寂滅と呼ばれる働きの地平であると説明される。サンスクリット語に、ムニという言葉がある。それは静かなる人と聖なる人の両方の意味がある。そしてブッダは、この静かで聖なる働きから生まれるのである。

しかし、もし静かな、聖なるものと呼ばれる人が固定的にあると考えるなら、それは間違いである。その源泉は、そこではもう働きが必要のない地平に引き上げる働きであり、ダイナミックなプロセスである。

君たちは私の提唱を聞いているね？ この提唱を聞きながら、中にはいい気分になり始めている者もいるだろう。提唱が眠りに誘う母親の子守歌を聞いているようだからだ。頭が右へいき、左へいき、あっさりと眠りの地平に入ってしまう。頭が右へ傾き、頭が左へ傾いていると、あっさりと、もはや思考する必要のない地平に入っていく。私が昔提唱を聞いたときに、私も経験したことだ。私の師家が話すとき、疲れてすぐに眠りに入ってしまったものだ。

私が師家の提唱を聞くときの深く満足のいく眠りほどの眠りをした記憶はまだない。豪華なベッドで眠るよりずっといい。しかし師家が「私の言うことを聞きなさい！」と叫ぶと、突然、私の目が開く。そして目が覚めた瞬間、ありとあらゆることを考えるのである。

23 ページ 文章

45 人の修業生が、1991 年のマウント・ボールディでの、とても暑い夏の摂心に参加した。4 日目に、提唱のあとの参禅の時間が 1 時間 40 分に及んだ。直日が参禅の時間の最後に行くと、老師がとても上気して疲れた様子で座っていた。齋座の前の休憩の間、直日は知客のところに行って、老師はこの暑さではそんなに長く参禅させられない、老師の健康に深刻な影響がある、修行者が参禅に来る時間かその人数を制限すべきだと訴えた。知客は老師にその話をすると言った。

午後になって、知客は老師とこの問題について話し合ったと報告した。老師は禅堂に長い時間を使わせて申し訳ない気持ちだと言っていた。自身の年齢と暑さのために、修行者全員に参禅させるのに長い時間がかかってしまった、と老師は言った。もしこれが禅堂で著しい負担になるなら、老師は申し訳なく思うし、改善するように努めると。直日の目がうるんだ。

しかし、適切に眠り適切に目が覚めれば、目が覚めるときに分かる。「この全世界が我が世界だ！ 私のまわりの全てのものが、我が家族の一員だ！」と。

それは不思議なことだ。それまで、松の木は松の木だと考えていた。それは人ではない。それは私ではない。虫は虫だ。私ではない。神は神だ。私ではない。しかし、適切に眠り適切に目が覚めるとき、全てのものが単一の統合された宇宙にあるとわかる。適切に眼が開け、適切な方法で目が覚めるとき、言語を超越した、すばらしい不思議な世界に確かに出会うのである。

これは、開眼とよばれる働きをする自己を明らかにすることであるといわれることである。それはブッダの意味するところ、仏性である。言い換えると、ブッダの働きをする自己が現前する。それがブッダと呼ばれるのである。その働きの源泉、仏性の源泉は寂滅のプロセスと呼ばれる。

そのような、悟りに目覚めていく楽しい地平、それは永続するだろうか？

悟った自己は、常に自身をみつめるという体験をする。悟った自己が見る全てのものが、自己なのである。しかし、この自己を見る自己という体験は、まだ不完全である。悟った自己は回帰という働きをしなくてはならない。

それはちょうど、子供を見る母親のようなものだ。子供は、母親自身以外の何者でもなく、母親の前に立ち現れる。母親が、母親自身以外の何者でもない子供を、何かしらその辺にある客体としてみることは耐えられないことだ。だから母親は赤ちゃんを抱きしめ、キスをするのである。母親は子供を産み、子供にキスし、そして母親でも子供でもないという地平があらわれる。言い換えると、寂滅を明らめるのである。

寂滅への回帰は、如来禪の伝統では、空や無を明らめることである。

よって、禅修業の基礎、そして始めは、関係性を構築することでどのように無を明らめるかを学ぶことである。母親が抱きしめたりキスしたりして子供との関係性を構築するように、松の木や鳥や石と関係することでどのように無を明らめるかを学ぶのである。

関係しているという地平、即ち無は、いったん分かると、必然的にどっと吹き出てくる。関係しているという地平は、サマーディ（訳注：三昧、禪定）と呼ばれる。サマーディから出定すると、自己が、目覚めた自己が現れるのである。

禅修業によって志すのは、完全な自己を明らめるということと、つまりは無を明らめるということとを交互に繰り返す、ダイナミックなプロセスを修業することである。そして、完全な自己から、不完全な自己、つまり目覚めた自己を明らめることである。目覚めた自己は、自己が常に自身をみていると知っている、不完全な自己である。

25 ページ 写真 注

コウゲツ・マルシア・ラディンと娘のレベッカ

私はこの国にきてほぼ 30 年になる。振り返ると、この文化圏の人々が持っている主要な問題は、自我がものであり実体であると確信していることだ。現実を、固定した自我の中にあって理解しようとする。神とは何か、ブッダとは何か、真理は何かと理解しようとするのである。

仏教が声を大にして言うのだが、母親は時々子供により靴や服を与え、時には心地いい服で子供を着飾らせるが、それは子供が成熟するプロセスの一部として、歩んでいかなければならない、ひとつの段階である。それは一時のことにすぎない。真の宗教は自我を着飾ることはしない、自我を固定することもない。物事の本質を理解しようとする自己の中に立つのである。

仏教はもちろん、成熟していく上で通らなければならない段階のひとつとして、人はいい服を着るし、神の愛を感じるし、（神が）気に掛けてくださっていると感じることもあるという。しかし本当に成熟したなら、着飾った人間の自我、つまり人間の文化の中の自我に固着してはならない。文化や文明は、利便さ、人類の快適さのために発展したものである。文明そのものの中、そのものには、超越性はない。

26 ページ 文章 右上

神、ブッダそして悪魔は、お互いにいい関係で、単一の世界にある。

26 ページ 文章 右下

隠侍は老師の薬石の準備をしていた。隠侍の母親が最近亡くなった。彼女（隠侍）は尋ねた。「私の母はどこに行ったのでしょうか？」老師は言った。「ブッダの心のところに戻った。」隠侍は尋ねた。「母は誰か他の生に輪廻したのでしょうか？ それともどこかに生じている意識があるのでしょうか？」

老師は言った。「輪廻は悪い妄想だね。花が死んだとき、地にかえって食料や他の花になる。今、君は母を包摂し、今、父は母を包摂する。今、私は隠侍であり、今、私は花であり、今、私は米である。」「老師が米であるなら、どうして老師はおなかがすくのですか？」「一日中、老師は米であり、もうおなかがすいているのさ。」

人類の進化に本当に大切なことは、文明ではない。それは生と死の働きそのものである。それこそが、人を教化して真に文明化させるのである。文明の真の目標は、寂滅の地平であるべきである。寂滅の地平は、人が生と死の両方、存在と無存在の両方、男性と女性の両方を完全に得たときに現前する。民主主義はよい、共産主義もよい、しかし、文明の進歩が真に目指すところの事実に目覚めてはどうか。文明化された人が真に目指すところは、その人の内に、2つの働き、即ち生と死の働きをもつ人であることだ。

民主主義や共産主義、もしくは何主義であれ、全ての文明は、真実の本質、文明の本質、幸福の本質を人々に理解させるよう教化しているように見えるが、しかし固定した自我に立ったままである。もし人が固定した自我に固着するなら、彼らが依って立つ文明、文化、経済システムが何であるかにかかわらず、無の自己を明らかにすることは決してない。

とにかく、そのような、タターガタの働きと呼んでいるものは、完全な自己つまり無を生起するプロセスと、二項対立のなかで揺れ動いて不完全な自我を生起するというプロセス、（このふたつが）何度も何度も交互に入れ替わるダイナミックなプロセスである。それは二つの反対の方向のプロセスを含む。ひとつは生といいもうひとつは死といい、ひとつは存在といいもうひとつは無存在といい、ひとつは男性といいひとつは女性という。

タターガタ禅はこれらの二極のプロセスをタタ・ガタといい、これは「かく行く」という意味で、またタタ・アガタといい、これは「かく来たる」という意味である。これが統合されると、その統合がタターガタといわれる。タターガタはブッダ、大仏に与えられる称号である。日本に行って、鎌倉や奈良にいくと、巨大な仏の像がある。これを大仏という。しかしタターガタ禅では、日本に行く必要はない。あなたが坐っているところ、ムニの境地に坐っているとき、あなたはまさに坐蒲の上で大仏なのである。

君たちは1時間や2時間、坐禅することができるだろう。しかし、5~6時間坐ると、その後どうしてもトイレとかにいかなくてはならないだろう？

だから、大仏の地平から、トイレに行く働き、食べて咀嚼する働き、疲れたり、右をむいたり左をむいたりする働きがおこる。それが人間の世界というものだ。

人間の地平は永続するだろうか？ いいや。必然的に、人類はもう一度大仏を明らめることになる。ブッダの意味するところは、このプロセスに向かって眼が開けた人類である。簡単に説明すると、「悟った人」とは知覚する全てのものが、自己であると理解する智慧をもっている人を意味するのである。

28 ページ 文章 右上

我々が住む過去、現在、未来のこの世の全ての存在は、完全なタターガタとして見ることはできない。神を見、ブッダを見ると話す人がいる。しかし、これは単に夢をみているにすぎない。このようなものの見方は単に夢をみているにすぎない。

28 ページ 文章 右下

理解の外のものがあると、すぐに気分が悪くなり、耐えがたく居心地がわるくなっても驚くことではない。初めて心の平安を得ることができるのは、全てを知る、そう、**全てを知る**智慧があなたの心に生まれたときだけである……。その意味するところは、全てのものがあなたと異なるものではないと理解することである。あなた自身以外のものはないのだ。

母が子供を見るとき、その子はブッダである。しかし、その母親が子供でなく何かの物体をみるとき、(例えば)それが多分子供にとって何か危険なものとする、母親は、その物をブッダとは思わないだろう。母親はそれを忌まわしい獣と思うだろう！ ああ、ブッダは狂って

いる！ 母親はブッダの役割をしているのに、母親は怪物の役割もすることになる！

だから、一度の悟りでは十分とはいえない。何回も何回も、悟りを経験しなくてはならない。

存在と無存在という二つの機能を通して、(その二つの) 源泉の地平がどのように統合されるか、私は昨日、説明した。そして、この二つの機能は必然的に対照をなし、最後に分離してしまう。

父とよばれる働きと母とよばれる働きが統合し分裂し、統合し分裂し、中立化し分裂し、このように前に後ろに揺れ動き、感情という熱というべきものを生み出す、その有様を説明した。結果として、父と母は完全に分離され、引き離され、二人の間に新しい個人を生み出す。

29 ページ 写真 注

臨濟寺の禅堂にて

タターガタの働きの中にあって、寂滅した聖なる人の境地にいるとき、過去、現在、未来という3つの世界が生まれる。父は未来であり、母は過去である。子供、感覚が幼い(訳注: sentient)もの、子孫は、現在とよぶべきものである。

生まれるということが意味するところは、父が外側から生み出し、母が内側から生み出す状況にあることであると、何度も何度も説明した。感覚が幼いもの、自我は、大仏を見ることができず、完全性の地平を見ることはできない。なぜなら、完全な地平、タターガタの働きが、感覚が幼いもの、自我を2つに分割して子孫を生み出すプロセスにおいて、消失するからである。感覚の幼いものはいつも、父親と母親だけである。

仏教の智慧の言葉では、過去、現在、未来の世界にいるかぎり、見ているものが神と思うなら、愚か者だぞ！ そのように私たちは人々に言う。しかし、人々はみな、何らかの教育をうけているから、どれだけ頭からほこりをはらおうとしても、既存の考えを取り除くことはとても難しい。

みんなが言う。「老師、お気を楽にしてください。参禅を減らしましょう。まだ病気は治ってないですから。」人間的な観点からは、これはいい言葉だね。しかし本当に大事なことは、無を明らかにすることである。そしてそのために、修業は必要なのだ。

30 ページ 文章

釈迦牟尼仏が究明したのは次のとおりである。タターガタの働きが根本的に不二であり、完全な寂滅のところにあるということである。あなたがここで坐禅をしているということは、思考を超えた、不二のタターガタを明らめることなのである。坐って、「疲れた、おなかがすいた」などと考えると、それは坐禅ではない。

30 ページ 写真 注

タンドー・ジェフ・バウアー（右）とコードー・ジョン・クレイグ

人は生まれると、成熟の修業をする。より広い働きである父から影響をうけ、未来へ動くからである。

しかし同時に、父が子供との関係性を作っている一方で、母親が呼んで言う。「父と関係性を築くだけでは、完全にはなれない。父の後につくことで、自分を肯定してはならない。自我を否定することで、私という源泉に戻ってきなさい。」

しかし父が言う。「だめだ！だめだ！ お前の仕事は成長することだ。私のところに来なさい！」こうして、子供はふたつの対立する世界の間で、後ろに前にぐいぐい引かれる。

英語ではジレンマという言葉があり、この状況を描写するのにとてもいい。自我は実在と非実在、存在と無存在の間で引かれるジレンマに陥っている。

君たちは今、二つの世界に引かれて生きている。生の働きとよばれる世界と、死の働きとよばれる世界である。そして、これは逃れがたい。自我は、どのようにすれば、直ちにこの二つの方向に引かれるというジレンマから逃れられるのか？

最終的に、父は子供から、彼が与えた父の働きを取り上げる。母は子供から、彼女が与えた母親という働きをはぎとる。そして、父と母は子供を廃する。子供の視点からすると、子供は父親から受け取った父親の働きに謹んで回帰する、また、母親から受け取った母親の働きに謹んで回帰する、両親の一方に回帰する、そのような動きをするのである。

31 ページ 文章 右上

アメリカでの 30 年の禅の教化で、信仰のある人でさえ、自我が固定したものであると考えていることに、ずっと驚いている。これゆえに、戦争や対立が起こるのである。

31 ページ 文章 右下

自己が自己を見るとき、まさにここで、禪の修行の力を体験するのである。

この話をきくと、どうしてこの両親は子供にひどいふるまいをするのか、言う人がいるかもしれない。考え方が物質的な見方にのみ依拠しているなら、確かにこれはとんでもなくひどいだろう。言い換えると、物質的な行動としてこれを考えるなら、とても暴力的である。しかし、これを意識の働きの機能として考えるなら、それは苦もない、自然なことである。子供が二つに分割されて、その両親に回帰するとき、子供は自分が父である、自分が母であると発見するのである。

父はどこにいる？ 母はどこにいる？ 母も父も、重力の中心にいる。二人は、寂滅した、聖なる人、すなわちムニの中に立っている。

君たちはみな、宇宙全体の重力の中心に立っている。重力の中心にたつとは、宇宙全体をつかむことである。人々はこのことに気づいていないから、いつもあれやこれやと思考するのである。

子供は二つに分離した。子供は母と父のなかにたっている。これが意味するところは、自己が自己を見るという、進化のある地点に到達したということである。

自身の他に何かが存在するとき、世界は恐ろしい場所である。しかし、目覚めると、男性の視点からでも、女性さえも彼自身となる。女性の視点からでも、男性さえも彼女自身となる。

私たちは性別で二分されているが、恐れることはなにもない。しかし小さな子供の時は自分以外の世界は未知のものに見えるのである。

自己が自己を見るから、見る自己と見られる自己との壁が最終的に崩れ去り、再びムニの地平、寂滅した、聖なる人の地平がおこり、そこでは男性と女性、生と死、存在と無存在が一つのプロセスとなるのである。これを、無を明らめると呼ぶ。しかし、修業の最初にこの点を把握するのはとても難しい。

人々が困難を覚える理由は、不完全な自我に固着したところに立ちつつ物事を理解しようとすることである。不完全な自我の中にたつて、政治を議論し、同じような方法で、不完全な自我の中に立って、神が何かを理解しようとし、現実を見つめようとする。この不完全な自我がその性質において無、そして完全な自己を明らめなくてはならないとする修業を行うことで、無を経験しなくてはならない。

33 ページ 文章

根本的な状態は全てを生み出し、全てを含む。それは確かに全てを生み出すのだけれども、真の愛の地平である。たとえ一匹の蟻が排除されても、根本的な状態ではなくなる。この愛を探することは可能である。それは私たち（という存在）が始まる人間の状態である。全ての動物、魚、草そして木はこの不完全な状態から始まり、完全な状態を探し求めるのである。

33 ページ 写真 右下

マウント・ボールディの庫裏の外でおこぼれを探している動物

このような理解を助けとするために、いくつかの興味深い公案がある。そのひとつは以下のようなものだ。南泉和尚にはたくさんの弟子がおり、ふたつの禅堂があった。ちょうど、ここアメリカで一つ目と二目の禅堂があるようなものだ。東と西の禅堂と呼ばれていた。

争いが起こった。尊敬を集める直日や聖侍との間で争いが起こったのかどうかはわからないが、ともあれ、禅堂のあたりにたまたまいた猫をどちらが自分のものとするかについて、ふたつの禅堂の僧侶の間で争いが起こった。東の禅堂を未来と呼び、西の禅堂を過去と呼ぼうか？

そして猫、猫を現在と呼ぼうか？ これは君たちが自力で、自らの宗教的智慧により理解しなくてはならない。

禅堂の僧侶たちが猫の帰属というつまらないことで争っている現場に、南泉和尚がやってきた。南泉和尚は猫の首をつかんで持ち上げ、ナイフを持って言った。「何か言え！ 何か言えたら、言葉を発したら、猫は助けよう。言えなかったら、私はここで猫をまっふたつにする！」

言うまでもなく、南泉和尚はここで強く人々を教化していたのだ。自己がどのように2つに分裂し、いかにして自我を滅するかについての教えだった。

つまらぬ争いをしていた僧侶が、猫をそのものとして見ることができたら、争いはおこっていなかっただろう。そうではないかね？

今年戦争がないならいいね。新聞を読む限り、すぐに戦争はないようだが、しかし、これについてはどうだ？

34 ページ 文章

老師は多くの家族でやってきた人たちへの得度を司った。彼は活発に話をし、僧侶として得度式、結婚式、お葬式などを執り行った。老師は（そうした儀式で）人々に人生のいいスタートをきらせたが、後に問題を抱えて戻ってくる人がたくさんあると、言った。だから、お葬式

は、もう誰も戻っては来ないから、一番良かった。

35 ページ 写真 注

老師と彼の妻の春代、マウント・ボールディでの大摂心の参加者、胆嚢の手術の10日後、

今年、戦争はあるだろうか？

アメリカは今、大統領選挙の最中だ。何がおこっているのか、興味があるね。ブッシュ大統領が白旗をあげるという人もいるね。

合衆国の大統領にはどんな人がふさわしいか？ 現在の合衆国にちょうどいいのは、ニクソンのような人だ。ニクソンなら猫をまっふたつにするだろう！

実際、南泉和尚に誰も答えることができなかったので、和尚は猫を斬らなくてはなかった。誰かが「自己が自己をみる」という地平から答えることができたら、南泉和尚はそんなことをする必要はなかった。

花を見るとき、あなたは自分自身をみている、蛇を見るとき、あなたは自分自身をみている、神を見るとき、あなたは自分自身をみている、そのように理解して参禅で答えることができないと、すなわち自己が見つめるといふ応答ができないなら、老師にまっふたつにされるだろう。

無の見解を明らかにすることができないから、老師にまっふたつにされる。まっふたつにされた蛇のように、ひとつはこっち、もうひとつはあっちだ。斬られたふたつは、醜くのたうちまわっている。それはつまり、あなたがあれやこれやとぺちやくちゃ喋っている姿そのものだ。

映画を観るより面白いぞ！ 参禅をすると本当に健康になる。自分の病気を忘れていたよ！ 君たちが参禅にきても気分はいいよ。

ご苦労さん！

36 ページ 文章

五年や十年の修業を経て、不完全な自我にいまだ囚われている人たちを老師が教導するなら、老師にとって、その人たちを教える人にとって、それがいったい何の楽しみというのか？ 冷たい水で顔を洗ってから参禅に来なさい！

37 ページ 文章

人類が進化するのに何百年、何千年かかるのか、わからない。しかし、生まれてから数か月か一年で、赤ちゃんが母親の乳房をつかんで、「ああ！ これは私自身だ！」という経験をするというのは興味深い。「神とは何か、現実の本質とは何か？」そんな難しいことを考える前に、あなたの幼いときのことを思い返してもらいたい。あなたの母親をみて「これが私だ！」と理解し微笑むことを思い返してほしい。

しかし、不幸なことに、成長の過程で、人は「ナンバー1」を気にするように教育をうける。いわば、自身の利益を注視するように教育される。「最適なものが生き残る」という視点に入るように教育をうける。するとすぐに、もう人は石や松の木や犬をとりあげて自身以外の何ものでもなしと思うことはなくなる。

しかし、自己が自己をみつめるという洞察と経験をするところまで進化すると、人は必ず、自己である他を生み出し、自己である他によって生み出されたいと思うようになる。

あれやこれやということなく、花を見るとすぐに、完全にその花を生み出す。松の木や山をみるとすぐに、その山を生み出し、何事も考える必要のない自己を明らかにする。

人が何かとの関係性を構築するときに立ち現れる完全性の地平は、真の存在が意味するところである。もし超越的な存在があると言うなら、無は超越的な存在である。タターガタ禅では、神、無、超越的なものは客体物として見ることはできないと説く。人はただ、自我を滅して直接的な経験ができるだけなのである。

不完全な自我が寂滅するところの無の地平は真の愛ともいえる。真の愛を明らめたいなら、その唯一の方法は、「私はあなたを愛する」とか「私はあなたを憎む」と言う不完全な自我を廃し、寂滅することである。

38 ページ 写真 注

マウント・ボールディでの初期の大摂心、1972年

39 ページ 写真 注

マウント・ボールディでの最初の得度式

40 ページ

臨濟寺をとりまく施設

ウィーン

1979年の春だった。ボーディ・マンダラの住職だったとき、父親がウィーンから電話をしてきた。この31年で2度目だった。1度目は、1969年で、母親が癌で危篤になったときだった。今回は、父親が心臓発作をおこして、ペースメーカーをつけて退院したばかりで、一人で暮らしていた。しばし会話をした後、心の底から、故郷に帰って父親の面倒をみなくてはならないと思った。ウィーンにもう一度住むという考えは、簡単なことではなかったし、31年前にウィーンを後にしたときの志にかなうものではなかった。当然、このことについて老師に話してご意見を願いますと、老師は答えた。「ウィーンに行きなさい。」そして、その年の夏の終わりごろに、そのようにしたのである。

合衆国を離れること、特に、本当に気に入っていたニューメキシコを離れること、何よりも老師のもとでの修業を離れることは、つらいことだった。ウィーンに戻ることも同じくらいつらいことだった。しかし、生家であり、幸せではなかった若いころを過ごした小さなアパートに戻ってきたのである。父親は思っていたほどにはケアがなかったもので、絵画修復の仕事にでた。夕方には、地下室にある「仏教徒のセンター」で1週間に2回集まってくる少数の人たちと坐禅をした。

それまでに、ウィーンではかなりのチベット人が活動していた。しかし禅は少なく、テーラヴァーダ（訳注：小乗仏教）が少しあるだけだった。そのとき、私がただ一人の禅の僧侶だった。さらに、私はオーストリア人だったし、街の評判になった。私たちの小さい施設は人だかりになった。新しい、大きな場所が必要だった。

40 ページ 写真 注

ゲンロー・ヘルベルト・コウデラ、ウィーンのボーディダルマの住職

私たち仏教徒の集まりが、都心部に場所をみつけた。400年以上前の建物の中に借りた部屋ではあったのだけれども。ここが、今でも私たちの場所である。

借りた部屋はひどく修理がされていなかったし、予算が余っていたわけではないのだが、私たちが必要とするよりあまりに広すぎた。たく

さんの部屋の中で、大きな部屋があり、禅堂にとって理想的だった。この部屋は本当にすばらしかった。私たちはそこを借り受けて、1980年の1月1日に移動してきた。

残りのスペースには、他の仏教徒のグループの人たちが出入りしていた。1階は、ベジタリアンのレストラン、本屋、健康食品の店があった。多くのお金と多くの労力が費やされ、禅堂が機能するようになった。禅堂は暖房がなく、窓は割られていた。よく掃除をして、準備が整った。古いマットレスを座布団にし、巻いてあった毛布を坐蒲にし、冬のコートで暖をとった。坐禅のスケジュールは週3日に増やし、庫裏の設備を間に合わせて整えると、さらに1か月に1回、坐禅会と夜坐をした。

このスケジュールは、さらに2日の朝の坐禅を加えて、今日まで継続している。(この朝の坐禅はゲンユウ・トレンクラーが主導している。彼はマウント・ボールディの3年間の修業の後、1991年の春に私たちの集まりに戻ってきた。彼は終身の知客である。)朝の坐禅はウィーンの人々にはうけなかった。その理由は想像するしかない。3回の坐禅の夜の他、水曜日に人が一番集まってきた。私の法話があるからだ。毎月の最後の土曜日の午後に、法の勉強があり、コーヒーやケーキがでた。

会員は80人ほどになったが、夜まで参加するのは平均して20人しかいなかった。毎年、初心者のためのいくつかのコースをもうけ、プログラムで宣伝した。初心者コースは20人かそれ以上になった。何らかの理由で(よくはわからないが)「修了生」の多くが続かなかった。ちょうど、(初心者コースが終わっても)続ける人がいるために、同じ数の古くからの生徒がいなくなるようだった! 初年は、私が禅について知っているわずかなことだけが頼りで、相談できる人もいないし、「孤独な戦士」のような心境だった。私の経験は、マウント・ボールディとボーディ・ダルマでの修業だけで、都会での修業は畑違いだ。それは大変な勉強であった。何よりも、自分の頭をやわらかくする必要があった!

41 ページ 写真 注

オーストリア、シャイブスの仏教徒センターの禅堂

老師については? 老師がはたした役割は? そう、読者の想像のとおり、彼はその現場にいた。少し戻って1979年の秋に、老師と春代夫人が「入門編として」やってきて、私は驚いたし、光栄に思った。老師と私の父が初めて会い、お互いの言葉はわからなかったけど、「心から心へ」とてもよく意思疎通した。老師は私の父のことが印象に残った。父は第一次世界大戦のパイロットの最後の生き残りの一人だった。

この二人は後にも会った。

仏教徒センターの誰もが老師の来訪に興奮していて、私たちはホールを借りて講演を行ってもらうことにした。講演には 500 人以上が出席した。不運にも、私たちが雇った通訳があまりドイツ語ができなかった。その通訳は日本人なのに、カソリックとして育てられ、仏教には縁がなかった。通訳は老師の話を適切に訳せなかったので、聴衆には失望が広がった。後年、老師は戻ってきて、最初の大摂心を行った。

オーストリア仏教連合が、私に来る 2～3 年前に、田舎に荒れ果てた古い建物を借りていたのは幸運だった。その建物はみすぼらしく、快適さとは程遠いものだった。しかし、摂心には適していた。シャイブスのセンターは現在に至るまで、摂心の場所として使っている。

その間に、私は田舎のセンターの責任者になり、そこを運営するスタッフが見つけれなくてクヨクヨしていた。しかし、1989 年の 9 月にマウント・ボールディで得度された僧侶の、ツ・オ・マチアス・コーエルが現れると、状況は変わり始めた。ツ・オはシャイブスに住み、数人のヘルパーとセンターを運営した。もう荒れ果てて汚くはなかった。そして、ドイツ人のありがたいお布施によって、その建物を買い取ったのである。センターには「禅の雰囲気」があり、とても心惹かれる場所である。

老師の大摂心では禅堂が満員になる。多くの修行者が、マウント・ボールディに行って修業した。熱心な修行者の全てが継続できたわけではないが、継続できた人たちにとって、継続的な修業の成果はとても明らかだった。特に摂心の間に明らかに成果があった。

43 ページ 写真 注

ボーディダルマ禅堂、ウィーン

看経は力強く、多くの人が色んな役目をするので、私たちの修業のうちの儀式的な時間が、スムーズに、うまく回るのである。修行者はヨーロッパ中からくる。鉄のカーテンが崩れて、旅行費用は高いが、ハンガリーからいつも行事に参加者がくるようになった。私自身は、ウィーンで摂心を 1 年に数回行っている。

1986 年から、ちょっと信じられない名誉だが、オーストリア仏教協会の会長をしている。禅の指導者になって、「オーストリアの仏教の法王」(友人が皮肉っぽくいうのだが) になって、講演やテレビ出演の機会がとても増えた。老師の教えに基づいて、時宜にかなって講演するようベストを尽くしている。そして繰り返し、老師がなんとおっしゃるかと思う。20 年の修業を経て、どれだけ(老師の教えを)理解しようと考えても、決して十分ではないと気付くと驚く。老師の教えを理解したと思うかもしれぬ、しかし、同時に、「最終的な」理解はないの

だと気付いている。しかし、正しい見解をたてることが重要なのである。

私たちはここ数年間、ここに来てもらって教化をしてくださった老師に本当に感謝します。特に、いつも歳を気にせずに無理させてしまいました！ 老師の努力が無駄にならず、老師の植えた種が根をおろし、いつか、果実をむすぶことを、切に希望します。

ゲンロー

インスブルック

1987年に、オーストリアに、臨濟寺の二つ目のセンターができた。アルプスの真ん中で、インスブルック禅堂は毎週数回の禅修業を行っている。センターはローランド・ドクロー・ジャッカルが設立した。彼は1987年に承周老師のもとで修業を始める前、ウィーンのゲンロー和尚のところで学んでいた。1987年、老師は初めてインスブルックを訪れた。

禅堂は中世風の魅力的な街の中にあった。ドイツ人のグループの協力を得て、ドクローはより多くの坐禅会をやり始めた。参加者は、オプションでウィーンの摂心に参加することができる。

ドクロー

マウント・コブ

1988年の11月に、サンフランシスコから北東に約2時間半のところにある、カリフォルニア州北部のひとつの土地の情報を得た。その後のある日、その土地を見るために車を運転し、夕方には購入手続きに入っていた。この土地の今後のために、老師の古くからの修業者の中から管理委員を探し、選出した。この人たちのお布施によって資金が集まり、法人を設立した。

法人は、1988年の12月30日に設立した。土地は1989年1月に購入した。最初の管理委員は、杏山承周老師、ロビン・アダムス、レナード・コーエン、ジャック・ドレーク、そしてマジョリー・エドグレンだった。新しいセンターの名前は、マウント・コブ、サイショウ・禅寺で、コブ山の、サイショウは完全に達成したという意味（訳注：「最勝」か）で、その禅寺という意味である。

センターの目的は、家族で修業する場所と外界から隔絶した女性禅堂を提供することであり、後に男性禅堂も提供した。我々は特別な儀式

用のホールの計画もしており、これは仏教徒の儀式のためにあらゆる地域のために提供されるものである。また、より多くの仏教徒が勉強できるようにするために、小さな図書館と教室ももちたいと思っている。そこには儀式の場所も含む。

土地は 312 エーカーで、それぞれのエリアを明確に区画するのに十分な広さがあり、しかも、歩いて行ける範囲内だった。この土地に住む豊富な野生生物のために、土地にはなるべく手をいれないようにしていた。多くの希少で絶滅に瀕する植物や花があり、これらを保存できてよかったと思う。

このプロジェクトにはたくさんの助けをかりた。ハギワラ・ヤスヒロ氏とその助手のステファン・アロンは法人設立手を支援してくれた。スティーブ・トレストンは、私が完全にこの土地に移ってこられるようになる前に、パートタイマーの管理人として助けてくれた。そして庭づくりを手伝ってくれた。コリン・テキ・オは、1年半にわたり、兼務副住職として助けてくれた。彼と二人で、カリフォルニア州と連邦の課税控除をもらうことができた。以上の方々に感謝します。また、ロサンゼルスや臨濟寺の他のセンターからの方々、バークレイやサンフランシスコの地元のサンガから来てくれた方々、作業をし、時間をさき、寄付をしてくださったこれらの方々に感謝します。

現在、最初の計画の段階だが、何らかのワークと坐禅会を週末にし、今ある坐禅会を東（訳注：西？）の港湾地区でやるようにした。

ホーコー・マジョリー・エドグレンは、1992 年春の時点で、サイショウの女性僧侶として得度される候補者だった。

45 ページ 写真 注

ミョウケン・ダイアナ・セジェーシオ、マウント・コブ サイショウ禅寺の副住職

また同じとき、タンデン・スタンとミョウテン・ジャクリーン・キンカノンとこの二人の息子が建設を手助けするため、完全にこちらに引っ越してきた。1991 年の秋、ジム・マシューズが会計役としてジャック・ドレークの後釜となった。トム・パパはボランティアで建築請負をしてくれ、バージニア・マシューズは基金立ち上げの先頭にたった。ケンドー・リチャード・ハンターにも深く感謝する。私たちの初期構想を設計してくれて、そのおかげで今、私たちが（施設を）使えるようになったのである。

現在、マウント・コブでの私の役割は、建設組織の計画者であり管理者である。人々はほとんど、週末や平日の短い時間にやってくる。朝と夕方に坐禅をし、普通の禅センターのスタイルで行事をする。老師はサイショウで多くの時間を過ごさなかったけれども、この世界で生活し働くうえでの、老師のエネルギーを生み出し、修業する力強さも生み出すくらいに、センターは本当に努力していた。

サイショウで人々が坐禅し行事ができるようになる。とても単純な修業だけど、それが故に人々がこの場所に惹きつけられるのである。ここの生活はとても原始的だし、娯楽はほとんどない。私は長く独りでいるから、寂しく感じたり退屈になったりすることはないかと聞かれる。起きると、坐禅、坐禅。料理、料理。食べて食べて、作務、作務。これが為すべきことである。規則に則った禅修業の日々で学び、また、杏山承周老師を見、そして共に活動して学んだことである。そうしたことで忙しいとき、さらにこの上に何を求めるといえるのか？これが、私の人生における、私の禅修業の美である。このように生活していると心が自由になり、何がしか私という存在が集中されてくる。私は、自分が固定した状態にあると思うとき、そこから自分を解放しようと常に努めている。とても沢山の時間を費やす大変なことだが、しかしすばらしい喜びでもある！ 何年にもわたってずっと忍耐をしてくださった承周老師に感謝します。私の人生を変えてくれた（禅の）道に感謝します。

46 ページ 写真 注

マウント・コブでの作業。(左から) タンデン・スタン・キンカノン、コーヨー・チャック・エンゲリッチ、ミョウタン・ジャクリーン・キンカノン、リトル・キンカノン、スティーブ・サンフィールド、ミョウクン、そして老師

47 ページ 写真 左上 注

マウント・コブ管理委員会 (左から、座っている者から) ロビン・アダマス、ホーコー・マジョリー・エドグレン、老師、ジム・マシューズ、レナード・コーエン、ミョウクン

47 ページ 写真 右下 注

ミョウクン、老師、そしてテキ・オ副住職、マウント・コブで、1990 年

48 ページ

臨濟寺

シマロン禅センターは臨済寺の本拠地である。ロサンゼルス市街の南に位置し、最近起こった近所とのトラブルもうまく切り抜けた。壁に囲まれ、素敵な建物は静かで、市街地であって禅センターは本当に（禅修行者の）安息地である。

和尚の得度はすべて、シマロンで行われる。シマロンは最近、臨済寺に改名した。臨済寺共同体の中での位置付けを示すためである。シマロンは老師がアメリカで設立した最初の禅センターで、1968年に遡る。それから、1971年にマウント・ボールディ禅センターが加わるまで、シマロンは臨済寺の修業道場だった。マウント・ボールディが加わって、シマロンはロサンゼルスに在家のグループのための修業センターになり、臨済寺の主な儀式を行う本部でもあった。

臨済寺の物理的な施設は、ジェンタイ庵を含む、中心的な建物に含まれる建造物に加え、寮の設備と二つの建物が離れたところにあり、道を挟んでハシェンダ、ジェンロ庵、そしてデンキョウ庵がある。

[48 ページ](#) [写真](#) [右上](#) [注](#)

老師の 85 歳誕生日の内々の集まり、臨済寺で、1992 年 4 月 21 日

[49 ページ](#) [写真](#) [右上](#) [注](#)

シマロン禅センター開所の直後、1968 年にお茶室での集まり（左から）コードー・ロン・オルセン、ショーザン・マーク・ジョスリン、ジム・ヤマモト、ジョージ・スタンニッチ、ロバート・ハーマン博士、老師、ゲッシン・ギセラ・ミッドワー、西谷啓治博士、エヨ・グロッサム、ダン・スナダ

[49 ページ](#) [写真](#) [左上](#) [注](#)

ホーセン（左）とテンシン・ユーニス・トロッパー

[51 ページ](#)

マウント・ボールディ

マウント・ボールディ禅センターは1971年に、承周老師が主たる修業施設として設立した。それ以来センターは冬と夏の制中（修業期間）を、老師の出席を仰いで催していた。厳しく雄大なサン・ガブリエルの山地、ロサンゼルスからたった1時間、一万フィートも登ったところで、禅修業には素晴らしい背景図である。冬の深い雪、夏の砂漠のような暑さという自然環境にふれるところだ。

臨濟寺の得度された僧侶はほとんど、ボールディにくる。こうした真摯な修行者たちは、世界中の臨濟寺のセンターのリーダーとなり、奉仕をする。だから、マウント・ボールディは臨濟寺の施設群の中心であるといってもいいだろう。

ここに住む修行者は、一年を通じて厳しいスケジュールに従う。冬の修業期間は、12月半ば（訳注：初め？）の臘八大摂心に始まり、4月初めの摂心に終わる。夏の修業期間は、6月下旬から9月初めまでである。春と秋の間、ボールディは少し緩やかなスケジュールとなる。朝と晩の坐禅に加えて、禅センターの土地の手入れと、マウント・ボールディ村の標高の高い地域の給水設備の維持作業があり、みんな忙しかった。センターは、設備を借りるグループの接遇もした。

52 ページ 写真 左上 注

フォントナ・ファミリー空手グループがマウント・ボールディで坐禅をする。

52 ページ 写真 下 注

キドー・エリック・ベルハウとゲンシュウ・クリス・ローの得度

老師のいない摂心

マウント・ボールディで、老師のいない初めての7日間の摂心が、1992年の7月に行われた。老師の6月の胆嚢手術が思っていたよりも随分と長引き、老師は夏の制中の初めの間、入院しなくてはならなかった。

19人が参加した。9人は得度をうけていた。通常の摂心のスケジュールがやや緩和された。1時間半遅く開静、1時間15分の作務が齋座の前に入れられた。粥座の後、3月の摂心から録音された提唱が流された。全員坐禅となり、いつもの初日の調整のあと、禅堂は落ち着く。マウント・ボールディのスタッフは経験を積んでいるので、摂心はスムーズに進む。エシン和尚が毎日、激励の言葉を口にする。

厳格な修業とともに、日が流れる。修行期間を経ると、禅堂での（大変な）長い日は和らぎ、人々は疲労しないようになる。人々は老師がいることに慣れていて、恐らく老師の存在が確かに坐禅の力をもたらしてくれていたのだ。ランカーヴァターラ経（楞伽経）には、菩薩の行が自然発生的なものとなり、また高貴な智慧になる、そのような自己が現前する地点に到達するまで、タターガタの力を保持することについて書かれている。この摂心で、人々はこのお経に書かれているプロセスを垣間見て、内なる仏性を明らかにする自身の努力に自信をもつことだろう。確かに、老師が西部に来てから、同じプロセスがおこり広がっている。伝統的な方法で老師の側近くで修業している弟子たちが、禅の活動で自立してゆき、それぞれ独特の方法で、（禅を）共有し（人々を）助ける場所を見出している。

5 日目の午後、老師が到着した。彼の不屈の心により、最後の 2 日間に 1 日 3 回の参禅があった。老師の退院としっかりとした回復をお祝いして、最後日の夕方、夕食会をした。

53 ページ 写真 注

レナード・コーエン（左）、老師と佐々木春代、マウント・ボールディを背景に、老師の手術のすぐ後

54 ページ

ジェメス

今年、承周老師のアメリカでの教化の 30 周年となるが、ジェメス・ボーディ・マンダラ禅センターにとっても節目の年となる。私たちはジェメスの資産に抵当を設定してから 20 周年になるのを祝うつもりでいる。創設者のミシェル・マーティンに深く感謝する。さらに、訪れてくれた多くの方、支持者、寄付をしてくれた方々、そして修業者の皆さんは、ジェメスの共同体のすばらしい歴史に貢献してくれました。本当に感謝します。

センターの当初の目標は、やりがいのある毎日のスケジュールでの通年の禅修業を提供し、ローテーションするスタッフを配置することだった。秋の期間は、より形式に則った禅修業に集中するときである。作務では、建物や地面を冬に備える作業にあてる。冬の期間は新年のお祝いやその他の催しの頃に始まる。春はセンターの建物を修理したり刷新したりしながら、植物を植える季節だ。夏の間、（禅目的以外の）

他のグループが間借りするのを受け入れるため、センターは満員のときが多い。穀物の収穫があり、貯蔵をする。

ボーディは毎月坐禅会をしており、老師は3つの大摂心を毎年、主宰する。

たくさんの場所から人がやってくる。彼らは、最近改造されたゲストハウスに泊まって、センターの日々の行事に参加したり、あるいは単にニューメキシコの景観とセンターの土地を楽しんだりする。

私たちは、承周老師の継続的な教化に恩義があり、彼の教えに改めて真摯に向き合う機会として、30周年を迎え喜んでおります。

ホーセン

55 ページ 写真 左上

ホーセン・クリスチャン・レインジャー、ジェメス・ボーディ・マンダラの副住職

55 ページ 写真 左下

春の作付け

55 ページ 写真 右

新しい温泉を掘る

56 ページ

バンクーバー

バンクーバーの禅センターは、町の小さなセンターである。私たちの話は、他のセンターと多分変わりはないだろう。頭が混乱した、神経質な人々が、人生をすっきりさせ、活力をとりもどすために禅修行に打ち込む。20年以上前、老師を摂心に招いて、禅のグループの人たちとセンターを立ち上げた。多くの人々が（摂心に）魅力を感じ、老師に定期的にここで摂心をしてもらうよう、お願いした。

私たちは、古い下町の倉庫に禅堂をつくった。近くには、鉄道、港湾、山があり、騒音が激しかった。1970年代の中頃、二つの建物を借りた。手狭だったけど、熱心な修行者でいっぱいになった。ヒッピーと麻薬の時代だった。不運なことに、センターを購入してセンターの基盤を安定させる機会を逃してしまった。30人から40人のひとが、高い関心をもって、熱心に摂心に参加したが、しかし人々が関心をもち、熱心にきてくれるということは、なかなかなかった。日々の活動に坐禅と参禅を組み込むことは、あまり重きを置いていなかった。様々な人数のグループが、仏教の寺やだれかの家で定期的に坐禅をしていた。市街地の小さな家を1984年に購入した。多くの人々、とくにトニーとレナードの情熱と努力が、この初期の頃にはどうしても必要だった。

五年前、老師はここに来るのを中止した。このとき、エシンがセンターの責任者としてやってきた。彼は、センターの責任者をするのが、難しいことであると思った。

バンクーバー禅センターは臨済寺の一部であったが、門戸は開いていた。センターは、市民のために、坐禅のための場所を提供し、坐禅の指導をした。エシンは法話に熟達してきた。数日間の修業をバンクーバーで行い、北西部のいたるところから、一人で修業していた人たちが出席した。エシンは他の修業に出席し主宰するように頼まれていた。ある時は他の禅のつながりの集まり、ある時は、他の宗教の瞑想する伝統をもつ人たちから要請をうけたのである。

カナダの仏教徒のグループの間で、次々とネットワークができていった。センターは、(そのネットワークに)参加するけれども、他の多くの禅センターと同様、国にロビー活動をする仏教団体をつくることには反対した。リローエトのヴァスト・マウンテンにあるビクトリア禅センターや、ダイコウ寺(訳注:曹洞宗の大広寺?)、そして他のグループに所属しない禅修行者と強いつながりのある人たちがいた。

センターにくる人たちは、真面目ではあるが、心は健康ではない。センターの財政は惨憺たるものだが、禅の精神は生きていた。人々の中には、可能なときには、老師との摂心に参加した。私たちは今後の方向性について議論している。センターとセンターの居住者がもっといい状態でいられるような最適な建物を探しており、またブリティッシュ・コロンビア州全体をカバーできる場所を探している。その合間に、禅の集まりと日々の生活を通じて、真の生き方を参究している。

エシン

57 ページ 写真 左 注

エシン、1976年、マウント・ボールディで。

57 ページ 写真 右 注

エシン・ジョン・ゴッドfrey、バンクーバー禅センター住職

58 ページ

イサカ

イサカ禅センターは 1978 年に誕生した。その時、老師は禅修行のセンターを作るために、ニューヨーク州北部の 64 エーカーの土地の寄付を断った。(老師が言った)「君がセンターを作りなさい、私が助力する。」(グループができてから) 6 年ほどたった、無秩序だが荒れてはいないヒッピーの集団が、組織化された禅センターに生まれ変わろうとした。ビーチ・ヒル・ポンド瞑想センターだった。

備品もなく、上下水道もなく、電話もなかった。初日、作業開始のベルをならしても、誰もこない。「バカにしてんのか」という答えがいつも返ってくる。老師は年二回、摂心をさせにくる。石油ランプのあかりで、朝の看経をする。雰囲気はロマンティックというか、息がつまりそうだったというか。

二年後、禅センターはイサカの下町に移動し、イサカ禅センターと改名した。コーネル大学をとおして、センターは 1980 年から 1984 年まで、経典のセミナーを主催した。

1986 年、イサカの南 6 マイルにある、すばらしい 46 エーカーの一筆の土地をヨシンとコウゲツ・ラディンが購入した。二人の家族と、禅センターのための住居とした。毎朝、そこで修業があり、その一方で、イサカでは禅堂が維持され、大学では夕方の坐禅が行われた。

禅センターは、最高の警備を敷く刑務所である、オーバーン更生施設でも修行を主宰した。

58 ページ 写真 注

イサカ禅センター ゲストハウス (左)、本堂と経蔵。禅堂は後ろの森の中にある。

1991年のイースター祭の前夜、ヨシンとコウゲツの家が全焼し、すべての所有物が焼けてなくなった。近隣、友人、臨済寺のサンガからの多大な援助を頂いた。3か月後には施設は復旧し、大撰心を行うことができた。その後の夏、全面復旧した。

ヨシン

59 ページ 写真 左 注

ヨシン・デイヴィッド・ラディン、イサカ禅センターの住職、3階建ての住居が火事で焼けた後、1991年4月1日、禅センターの家の前に立って。

59 ページ 写真 右 注

コウゲツ・マルシア・ラディン

60 ページ

シャーロットビル (訳注：アメリカ東部の都市)

私たちの20周年記念が近づいても、ブルー・リッジ禅グループの修業は本質的にかわらない。しかし、少しずつ、大きくなり進化している。シャーロットビルの市街地にある、もともとの禅堂を離れなくてはならなくなり、フィル・ハートマンの家に落ち着くことができた。彼は、最初、韓国の(禅の)指導者であるソウン・サンの弟子であった。フィルは無料でスペースを貸してくれ、倦むことなく修業に没頭した。儀式は臨済寺の他のセンターと根本は同じであるが、色々な伝統的背景をもつ人々が出席したので、修業は非常に素晴らしいものになった。それは普遍的な雰囲気と力強さに満ちており、修行者の顔触れがこのようなものでなかったら、そんなことはなかっただろう。

シャーロットビルの禅堂での毎日の修業に加えて、作務をし、フラトップ・マウンテン禅堂で1日何回も坐禅をした。ジェンタイ・サンディ・スチュアートとセイコー・トム・ダベンポートはたいてい、私たちに加わって、何物にもかえがたい助力をしてくれた。ジェンタイは、何人かのメンバーに得度をした。

どのように老師の教化に感謝の言葉を述べるかは難しい。カラスの鳴き声とか花の真理に迷い込んで行く楽しみを感じる時、合掌してお辞儀をし、老師が導いてくださった洞察が私の心の中におこるとき、何度も老師に深い感謝の念を抱くのである。

ビル・ステファنز

ロング・アイランド（訳注：アメリカ東部の都市）

ロング・アイランド禅センターはソーゲン・エドガーとリタ・カンの家の中にあった。1階の半分がカーテンで仕切られ、恒久的な禅堂となっていた。いつも出席する修行者は少なかったが、何人かはとても熱心で、40分かけてやってきては修業に参加した。不定期的な間隔で、週末の坐禅会を行った。出席者が多く、老師の古くからの修行者がニューヨーク市の地域からやってきている。身命を惜しまず、人生を私たちのために捧げて下さる老師に心から感謝します。

ソーゲン・エドガー・カン

61 ページ

ビクトリア（訳注：カナダ西部の都市）

1974年、ラマ・タシ・ナムギャル（訳注：チベットの僧侶？ 不詳。）がビクトリアにやってきて、借家でプージャ（訳注：ヒンズー教の供養礼拝）を毎夜し始めた数ヵ月後、ケンドーは一週間に一回夜に、彼の居間兼寝室兼プージャの部屋で坐禅を取り仕切ってほしいと依頼を受けた。そこで、木曜日の夜に2時間の坐禅を始めた。1975年に老師がビクトリア大学で講演をするまでは、（出席者は）3人か4人だった。老師の講演で、数か月のうちに木曜日の坐禅に人々がたくさん集まり始めた。人々はコートの上で坐禅し、経行はとても混雑した。一時の洪水はすぐにひいた。日々、刻々と変わる状況をいろいろと試しながら、ビクトリア・ダルマ・センターでの毎週の坐禅を続けた。ラマは何度も参加した。

ある日、以前はマウント・ボールディの僧侶で、ビクトリアに移ってきたデイヴィッド・プトレミーが摂心から戻ってきてやりたいこと

を言い始めた。彼は禅センターを設立したいといった。「老師のために」こう彼は強調した。ちゃんとした拠点といえる場所もないし、坐禅の出席者は精彩を欠いていたし、私たちはそのような組織作りは単なる書類作業や頭痛ではすまされないとビクビクした。しかし、デイヴィッドの意思は強く、ビクトリア禅センターの集会在 1980 年 12 月に初めて催された。そのあと、デイヴィッド・プトレミーは還俗し、それ以来連絡を寄こさなくなった。しかし、彼の遺産は生きていた。今では会員はしっかりとし、参加する修行者も増えた。

1985 年に、ケンドー・リック・ハンターの家のある森で、初めての週末の行事を行った。屋外の、底上げされた木の床の上で坐禅し、テントで寝た。この行事の期間中、落石を縫うようにして森の中をぐるぐる降りて戻ってくる経行コースをつくった。バンクーバー禅センターの住職であるエシン・ジョン・ゴッドfreyはこの週末の行事に何度も参加した。彼が参加してくれて、会員の意識と修行の質をよく維持し強めることができた。エシンは今では月に 2 回（月曜の夜）に私たちの行事に参加する。その時、エシンは 3 回の坐禅の間に 20 分の法話を言い、最後の看経の後、お茶をしながら質問に答えてくれる。彼はまた、夏の 5 日間の行事を 2 回、主宰し、一番最近ではバンクーバーとヴィクトリアの間のガリアーノ島で行った。

1991 年、色々なメンバーが全仏教徒のプログラムの一環として、ビクトリア大学の全宗派のための教会で、日曜日の朝の坐禅会をするようになった。他にも、入門編の行事をサポートする人たちがいる。

ケンドー

61 ページ 写真 注

ビクトリア禅センター

62 ページ 写真 左 注

セイジ・ボブ・マモーザー、アルブケルケ禅センターの住職

62 ページ 写真 右 注

レドンドー・ビーチ、承周禅寺のコードー・ロンとミョーセン・マルシア・オルセン。コードーが承周禅寺を建てたことで、得度をうけたアメリカ人の臨済宗の僧侶が初めて自身の国に寺を建てるという節目となった。

63 ページ 写真 左 注

タンドー・ジェフ・パウワー、プエルトリコ禅センターの住職

63 ページ 写真 右 注

テキ・オ・マイケル・ラドフォード、臨濟寺とマウント・コブ・サイショウ寺の前副住職、現在はニュージーランドにいる。

64 ページ

質疑応答

1992 年の 6 月 23 日、イサカ禅センターにて。池のそばで、大摂心の締めくくりに。

翻訳：堀 宗源

質問：何年も修行しても、自我という考えを滅するのがとても難しいのはなぜですか？

老師：なぜなら、人はこっちやあっち、善や悪に引っぱられるからだ。その両方をきりすてるという明確に意を決しなくてはならない。そうすれば、全てが明確になる。池に飛び込めば、熱いも冷たいも、神も悪魔も消え去る。

質問：心が静まりかえっていて、そして心の乱れがおこる時、これが「1 が 2 にわかれる」といわれることなののでしょうか？

老師：そうだ。しかしまだ完全には 2 つに分離していない。もし完全に 2 つに割れると、それは無である。無は完全で、良き意思にみちた働

きである。母親が母親としてふるまう時、これは無の働きである。父親が父親としてふるまう時、これも同じように無の働きである。完全に自己を明らかにするのはこのことである。

64 ページ 文章

殿司が四弘誓願文を読み始めた。「衆生無辺・・・」声の調子は高かった。「違う違う」老師は言った。「去勢された馬みたいだな。」老師は深い大きな声でお経を読んでみせた。殿司はできるだけ低い声でもう一度やってみた。「とてもよくなった。」老師は言った。「便秘の馬みたいだな。」

64 ページ 写真 注

経典セミナーの会合、1982年。フィリップ・ヤムポルスキー（左）、タイ・ウノ、ショウタロウ・イイダ、そして老師

しかし、君たちが不完全な状態のとき、記憶といった事柄に拘束され、閉ざされてしまう。まさにここで疑念がわくのである。無の地平では疑念はない。池で泳いでいるとき、疑念はない。多くの衆生のうちの一人になるのである。

質問：宇宙が自己であると明らかにするプロセスを説明していただけますか？

老師：池に飛び込め！ まっすぐに池に飛び込んで、空を直接体験するのだ。そのような質問がおこるのは、まさに君が人類だからだ。池に飛び込めば、魚が友達だ。魚はそんな質問を発しない。

質問：宇宙にはたくさんの混乱があります。どうしたら逃れられますか？

老師：それは通常考え方からおこる質問だ。私はそんなふうには考えない。こういう（逃れたいという）考え方は仏教にまますみ受けるけれども、しかしそれは根本的に間違っている。

質問：子供を抱き上げて、「いい子だ」と自慢げに言えるなら、それはどのような場合でしょうか？

65 ページ 写真 右上 注

イサカ、1992 年

65 ページ 写真 右下 注

いい靴やかわいい服に興味をもつということは、それは子供に必要なことである。自己を飾る宗教は必要である。それは人類の進化の一部である。ほとんどの宗教が、不完全な自我を安心させる方法を理解するというに最も力点を置いていると思われる。それがうまくいくなればそれでよい。宗教のそのような側面を批判し、拒絶するというのは禅の立場ではない。しかし、そこ（不完全な自我を安心させること）に固着するなら、生から自由になるという体験をすることはできなくなる。無を体験することはできなくなるのである。

老師：わからない。親が子育てをしている最中に、自分の子が良い人間になるか悪い人間になるかなどと思ったりしない。それは後に反芻することだ。母親と父親が考えることはただひとつ、「この子を愛さねばならぬ」だ。

質問：子供は禅の修行を何歳で始めるべきと思いますか？あるいは子供は始めないほうがいいのでしょうか？

老師：禅は愛の働きであるから、赤子が生まれたときから、母親は子供に禅を教えているといえる。

質問：生の力と死の力はどのようにありえるのでしょうか？さらに不生と再生についてはどうでしょうか？

老師：そこに対立はない。生と再生があり、死と再死がある。しかし、このプロセスにおいて、もはや生まれる必要のない自己がおこるのである。しかし、常にこの生と再生が繰り返される。こうした絶えることのない反復の働きの中に、反復を求めることのない働きを体験しなく

てはならない。君が今体験しているのは、生の力と死の力に振り回される自我である。このゆえに、(先に言った) 絶えることのない反復が存在してしまうのである。反復を求めない働きを体験すれば、寂滅した聖人の境地となる。

66 ページ 文章 右上

私が修業期間中に体調を崩すと、老師はいつも病室まで来てくれた。老師は控えめな気遣いをしてくれていたと思う。典座だったあるとき、指を切ってしまい、手と手首がバイ菌で腫れあがった。老師は部屋にはいつてきて、やさしい目で私の手をみてくれた。医療の現場にはないものだ。

66 ページ 文章 右下

物事の表面をみているだけでは、タターガタ禅を理解することはできない。タターガタ禅では、禅宇宙がこの一粒の米以上の何ものでもないと言われる。全てがこの丸いものに還元されるのである。境界線があるというものの見方では、理解するのは難しい。ある人々は、納得せずに言う。「老師、やはり外部の世界があります。」しかし、彼らは私たちが住む世界について完全に知りえていないのである。

つまり、神の王国を体験し、人間の王国を体験する。人間の王国に過度にひっついていると、神の王国を望むようになるだろう。しかし、人々は神の王国を必ず体験するのであって、そんなものを望む必要はない、そのように仏教は説く。(一方で) 神の王国に心がとらわれていると、人間の王国は現れてこない。ではどちらが良い？ 絶えまない繰り返しがいいか、神の王国に行くのがいいか？ 神の王国にいくと、トイレもレストランもない。人間の王国には、トイレとレストランはある。だから、両方が必要である。日々、両方を体験するのである。

質問：天文学者によると、宇宙はビッグ・バン以来膨張をしています。しかし、その終局についてはよくわかっていません。宇宙は永遠に膨張し、最後には冷たい塵に分解されてしまうのか、それとも、あるときに膨張が反転して始まりの状態であった火の玉に戻ってしまうのか？ この点について、仏教はどのように考えるのでしょうか？

老師：こういう類のことは、禪が 2500 年にわたり話してきたことだ。天文学者がこうしたことを夢見始めたのは最近のことだ。膨張には最終的には限界がある。膨張の限界があると、天文学者は言っていないか？

質問：まだわかっていません。二つの理論があるのです。

老師：人はすぐに自身の限界にたどりつく。限界にたどりつくとき、あたりを見渡して死にゆく働きを始めなくてはならない。準備はいいか？

質問：老師の夢はなんですか？

老師：若いころは、夢があった。しかし、50 歳のとき、夢をもつのをやめた。最近、また夢をもつようになった。しかし夢をもつとすぐに忘れるんだ。夢が終わると、消え去ってしまう。人はほどなく、夢をもつことをやめる歳になってしまうが、再び夢を見る時間を長く生きてもらいたい。しかし、すぐに忘れてしまうだろう。思い出そうとしても、できない。「夢があった」とわかっているけど、それが何だったのか、いうことはできない。

宇宙の話に戻ろう。最近では皆がこのことを気にしている。だから、一言言いたい。学者と一般の人々は、宇宙に関する理論を気にしているが、私は気にしていない。なぜなら、宇宙は自己だからだ。宇宙の起源には何の問題もないのである。

68 ページ 文章 右上

老師が提唱のあと、袈裟を脱いでいると、知客が「提唱は明瞭でした」と言った。

老師は答えた。「私の提唱はいつも明瞭だよ、今日、君の心も明瞭だよ。」

68 ページ 文章 右下

世界があらわれるプロセスを本当に知ったなら、もうそれ以外に何も知る必要はない。宇宙の創造的なプロセスに身を委ね、共に流れる以外のことは、何もないのである。

禅の観点からすると、なさねばならないことはただ一つで、それは膨張と収縮の力を包摂し、それらを自己のうちに内面化することである。この二つの力が宇宙をつくりだす。これらの力は、常に膨張し収縮している。人は宇宙を客体物としてみる。宇宙を客体物としてみる知見は何であっても、不完全な知見である。完全な知見では、もはや宇宙を客体物としてみる必要はなくなる。しかし、天文学者は宇宙を客体物として見て、こんなふうに、あんなふうに宇宙が創造されたと理論を展開する。このような理論は、人間のものの見方からみた宇宙を基礎としている。しかし、宇宙が螺旋状であれ球状であれ、宇宙そのものは、そんなことは気にはしていない。人類だけがそんなことを考えている。タターガタ禅は宇宙の膨張と収縮のことだけを説き、どのように宇宙が創造されたかは説かない。天文学者は宇宙はこれこれこのように創造されたなどと言うかもしれぬが、禅は何もいわない。もし私がこんなふうに宇宙が創造された、そんなことを知りたいなら、天文学者に聞かないといけないね。だから教えてくれ。しかし、究極的には、「この全てがどこに導かれるのか？」という問いになる。その一方で、そもそもこの宇宙はなぜ創造されたのだろうか？

質問：いくつかの宗教では、溺れかけている男の子が男に助けられ、二十年後にその男のグル（訳注：ヒンズー教の導師）になったとか、他にも不思議な偶然的な出来事があります。禅にはこのような話がありますか？

69 ページ 写真 注
ヴェネツィア、1991 年

老師：何かしらそういう話を用意したいなら、その類のものはたくさんある。人々が面白がるからね。でもそんなのは夢みたいなものだ。

質問：どのようにすれば、固定されない本質を理解できますか？

老師：その質問をする人は、固定的な本質もっている。もしあなたの本質が固定されないなら、この問題を考える必要はなくなる。学んでいく上で、ふたつの立場がある。ひとつは、自己を固定する立場で、もうひとつは、自己を固定しない立場である。また、自己を固定する文

化的な作用と、自己を固定しない文化的な作用がある。両方が必要だ。自己が固定されていると考える立場に追い込まれると、客体である世界に縛られてしまうだろう。自己が固定されていると考える文化は、人類の幸福を追求する文化である。しかし、こうした幸福を、固定した自己が見出すことはできない。しかし、固定した自己の文化は、人間性のプロセスの一部なのである。(そのプロセスが進んで) 自己を固定したものとみない文化があらわれると、初めて、「ああ！ それが神か！」という体験をするのである。そして、もう客体である世界にとらわれることはない。

70 ページ 文章

日本語の「宗教」という言葉は、(英語では) たいてい”religion”と翻訳されるけれども、それは実際には究極性の根本的な状態についての真理を参究することを意味している。神の存在とか、そんなことは関係ないのである。

問題は、あなたがどのように自身の真の本質を明らかにするかということだ。固定した自己を滅却することによってのみ、あなたの真の本質を明らかにすることができるのである。

71 ページ

私たちが禅と呼ぶこの道、それは最後には深く感謝をするというところに行きつく。その道に沿っていくと、ありがたくないことにたくさん出会うかもしれない。しかし、それは私たちがまだ最後にたどりつくところに達していないからだ。最後にたどりつくところがわかっていないから、怒りや恨みといったことがおこる。それがわかれば、心から感謝をするということがわかるのである。

その最後にたどりつくところは、どのような基盤の上におこるのであろうか？ それは禅が説くところである。私はこの30年間ずっとそのことを説いてきた。

私はもうすぐこの世界と皆とに別れを告げる頃にさしかかった。私の教えに間違っただけの印象があれば、祖師を攻撃するようなことになる。だから、私は根本的な状態について話しておく。それは真に感謝をするという地平なのである。